

『リア王』 1幕4場に見られる 二つ折り本固有パッセージに関する一考察

辻 照彦

はじめに

シェイクスピアの『リア王』には重要なテキストが二種類存在する。それは、第一・四つ折り本（1608年）と第一・二つ折り本（1623年）のテキストである。両テキスト間には、単語やフレーズから数行にわたるパッセージのレベルに至るまで、さまざまな異同が見られる。そのため、両テキストを互いに完全に独立した実体と見なしたり、二つ折り本を四つ折り本のシェイクスピア自身による改訂版とする見方が1980年代以降有力となってきたことは周知のとおりである。

『リア王』の二種類のテキストには、第一・四つ折り本（Q）にしか見られない合計で約300行分の台詞と、第一・二つ折り本（F）にしか見られない合計で約100行分の台詞がある¹⁾。四つ折り本固有のパッセージについては、もともとシェイクスピアは四つ折り本のように書き上げたのだが、それらのパッセージが劇場関係者によって上演のために削除され、それが二つ折り本の印刷所原稿に反映されたと一般に考えられている。四つ折り本がオリジナルの形で、Q→Fの順序で、削除による改訂がなされたということである。

二つ折り本固有のパッセージについては、研究者の間で意見が一致していない。『リア王』の場合、3行以上のパッセージに限っても12カ所あり、『ハムレット』の3カ所と比べると比較的多い。これらのパッセージは、理論的には、両テキストのどちらをオリジナルの形と考えるかで、削除とも加筆とも考えられる。Qをオリジナルに近いテキストと考えれば、改訂の順序はQ→Fとなり、二つ折り本固有のパッセージは、後に、シェイクスピアか別の劇作家によって加筆されたものと考えられる。他方、Fをオリジナルに近いテキストと考えれば、改訂の順序はF→Qとなり、二つ折り本固有のパッセージは、偶然脱落したか（単語やフレーズと違い、この可能性は低い）、誰かの手によって四つ折り本の原稿から削除されたことになる。

筆者は、後者の削除説を支持する立場から、問題のパッセージが四つ折り本の原稿から欠落した原因を探るため、個別のパッセージの分析を続けてきた。二つ折り本固有のパッセージの多くは、ほとんど痕跡を残さない形で四つ折り本から欠落しているため、意図的に削除されたことを示す証拠を見つけることはなかなか困難である。そんな中、1幕4場の二つ折り本固有のパッセージは、そのパッセージの前後にも両テキスト間に異同が見られ、改訂の手順や意図を探るためのヒントに恵まれた貴重な例となっている。

今回、1幕4場の二つ折り本固有のパッセージを、他の類似した異同箇所と比較しながら分析を進めていたところ、四つ折り本テキストの生成に深く関与し、異同発生的重要原因の一つとなったと考えられる興味深い改訂者の存在が浮かび上がってきた。この改訂者を仮定することで、『リア王』の二種類のテキスト間の少なくとも一部の異同について、

より単純に説明することができると思われる。本論では、三つの例を示しながら、この改訂者が行ったと思われる作業を復元し、そこから見えてくる改訂の意図について明らかにしたいと思う。

1. 1 幕 4 場の二つ折り本固有のパッセージ

1 幕 4 場の最後のところで、家来の数を一方的に減らそうとするゴネリルの態度に激怒したリアは、リーガンの力を借りて、ゴネリルに復讐すると脅して退場する。危機感を抱いたゴネリルは、即座にリーガンに手紙を送り、共同戦線を張ってリアに対抗しようとする。この部分の、ゴネリルとオルバニーの台詞15行分（オルバニーは1行のみ）が二つ折り本にのみ見られる。脅迫めいた言葉を残してリアが退場した後のゴネリルの台詞から見よう。第一・二つ折り本では次のような展開になっている²⁾。

F:

Gon. Do you marke that?

Alb. I cannot be so partiall *Gonerill*,

To the great loue I beare you.

Gon. Pray you content. What *Oswald*, hoa?

You Sir, more Knaue then Foole, after your Master.

Foole. Nunkle *Lear*, Nunkle *Lear*,

Tarry, take the Foole with thee:

A Fox, when one has caught her,

And such a Daughter,

Should sure to the Slaughter,

If my Cap would buy a Halter,

So the Foole followes after.

Exit

Gon. This man hath had good Counsell,

A hundred Knights?

'Tis politike, and safe to let him keepe

At point a hundred Knights: yes, that on euerie dreame,

each buz, each fancie, each complaint, dislike,

He may enguard his dotage with their powres,

And hold our liues in mercy. *Oswald*, I say.

Alb. Well, you may feare too farre.

Gon. Safer then trust too farre;

Let me still take away the harmes I feare,

Not feare still to be taken. I know his heart,

What he hath vtter'd I haue writ my Sister:

If she sustaine him, and his hundred Knights

When I haue shew'd th'vnfitnesse.

Enter Steward.

How now *Oswald*?

What haue you writ that Letter to my Sister?

Stew. I Madam.

(1. 4. 310-335; TLN 830-859)

手紙が用意できたことを確認したゴネリルは、オズワルドに対して、すぐに仲間を連れて馬でリーガンのもとに手紙を届け、速やかに戻ってくるように命じる。その後、ゴネリルがオルバニーの軟弱な態度を諫め、それに対してオルバニーが控えめに反論して1幕4場は終わる。

上の引用と同じ部分が第一・四つ折り本では次のようになっている³⁾。

Q:

Gon. Doe you marke that my Lord?

Duke. I cannot bee so partiall *Gonorill* to the great loue I beare you,

Gon. Come sir no more, you, more knaue then foole, after your master?

Foole. Nunckle *Lear*, Nunckle *Lear*, tary and take the foole with a fox when one has caught her, and such a daughter should sure to the slaughter, if my cap would buy a halter, so the foole followes after.

Gon. What *Oswald*, ho. *Oswald.* Here Madam.

Gon. What haue you writ this letter to my sister?

Osw. Yes Madam.

(D2v 13-24)

四つ折り本では、道化が退場した後にあった、リアの乱暴な家来たちがもたらす脅威とその対抗策に関するゴネリルとオルバニーのやり取りが消えている。また、少し前の、ゴネリルが道化に退去を命じる台詞に注目すると、そこからオズワルドを呼びつける言葉が消えている。その代わりに、同じ表現が道化の退場直後に現れ、さらに、その後、二つ折り本にはなかった、「はい奥様」というオズワルドの短い返事が続いている。

四つ折り本と二つ折り本にパッセージレベルの異同が見られるとき、その生成過程においてどちらが先で、どちらがその改訂版なのかがいつも問題になる。今回のケースも同様で、人によっては四つ折り本の短いテキストが先にあり、それが二つ折り本のように拡大されたと考えるだろうし、また逆に、二つ折り本のテキストが先にあり、それが四つ折り本のように短縮されたと考える研究者もいるだろう。

しかし、1幕4場の引用した部分については、その成立の順序が、Q→Fではなく、F→Qである可能性が極めて高い。二つ折り本固有のパッセージをほぼ一貫して、四つ折り本テキストへのシェイクスピア以外の劇作家による加筆と考えているストーンも、この

パッセージに限っては、二つ折り本がオリジナルで、その一部が削除されて四つ折り本のテキストが生まれたと考えている⁴⁾。このパッセージがないと、その後のところで、手紙の話が突然持ち出されることになり、ゴネリルが夫の弱腰な態度を非難し、それがもたらす危険性を強調する展開にも唐突さが残る。しかし、二つ折り本固有のパッセージがあると、これらの話が上手くつながっていく。四つ折り本の展開が唐突なので、スムーズな流れになるようにパッセージを追加したと主張することもできるかもしれないが、実行可能性を考えると、そのような主張に説得力はないだろう。

このパッセージについてF→Qという成立の順序が確定できると、パッセージを削除した改訂者が、それに付随して施したと考えられる微修正についてもはっきりとしてくる。改訂者は、ゴネリルの‘This man hath had good Counsell’で始まる台詞から始めて、オズワルドへの3回目の呼びかけである‘How now Oswald?’までを一気に削除した。そして、その位置に、もともと少し前に置かれていた、オズワルドへの1回目の呼びかけを移動し、さらに、それに対するオズワルドの返事(‘Here Madam’)を加筆したのである。

この改訂は、パッセージを削除し、短い台詞を移動し、そして、それに対する短い返事を加筆するだけなので、その行為者として劇作家を想定する必要はなく、印刷所の関係者にも十分実行可能なものだろう。その素性がどのようなものであれ、改訂者は、なぜこのような作業を行ったのだろうか。改訂者が、1幕4場のパッセージを削除し、さらに微修正を施した理由について考える際、四つ折り本に見られる、他の類似例が参考になる。まず、5幕3場に見られる、短い台詞が移動されている現象を見てみることにしよう。

2. 5幕3場に見られる台詞の移動

5幕3場の山場の一つであるエドガーとエドマンドとの決闘の後、エドガーは自分の身分を明かした上で、地獄のような逃亡生活と父グロスターの最期について語る。そこに、血の付いた剣を持った召使が登場し、ゴネリルが自害したこととリーガンが毒殺されたことを告げる。そして、その混乱の中に、最後までリアに忠義を尽くしたケントが登場してくる。このあたりが、第一・二つ折り本では次のように描かれている。

F:

Enter a Gentleman.

Gen. Helpe, helpe: O helpe.

Edg. What kinde of helpe?

Alb. Speake man.

Edg. What meanes this bloody Knife?

Gen. 'Tis hot, it smoakes, it came euen from the heart
of — O she's dead.

Alb. Who dead? Speake man.

Gen. Your Lady Sir, your Lady; and her Sister
By her is poyson'd: she confesses it.

Bast. I was contracted to them both, all three
Now marry in an instant.

Edg. Here comes Kent.

Enter Kent.

Alb. Produce the bodies, be they alieve or dead;

Gonerill and Regans bodies brought out.

This iudgement of the Heauens that makes vs tremble.

Touches vs not with pittty: O, is this he?

The time will not allow the complement

Which very manners vrges.

Kent. I am come

To bid my King and Master aye good night.

Is he not here?

(5.3.222-237; TLN 3169-3191)

この二つ折り本に見られる流れは、基本的に、四つ折り本でも同じである。パッセージはもちろんフレーズの削除や付加も見られない。しかし、目立たないものだが、上の引用の中ほどに見られるエドガーの台詞 ‘Here comes Kent’ が、四つ折り本ではもう少し後ろに現れる。召使が剣に付いている血がゴネリルのものであることを告げるところから四つ折り本の展開を見てみることにしよう。

Q:

Gent. Your Lady sir, your Lady, and her sister
By her is poysoned, she hath confest it.

Bast. I was contracted to them both, all three
Now marie in an instant.

Alb. Produce their bodies, be they alieve or dead,
This Iustice of the heauens that makes vs tremble,

Touches vs not with pity. *Edg.* Here comes *Kent* sir.

Alb. O tis he, the time will not allow *Enter Kent*
The complement that very manners vrges.

Kent. I am come to bid my King and maister ay good night,
Is he not here?

(L3r 13-23)

エドガーがケントの到着を告げる台詞は、もともとどちらの位置にあったのだろうか。テキストの変更が、Q→Fなら、エドガーの台詞は前に移動されたことになり、F→Qなら、後ろに移動されたことになる。引用した部分に関する限り、韻律に答えを解く鍵の一つが隠されている。このあたりはブランクバースが比較的整っている箇所であり、二つ折り本では韻律に乱れはないが、四つ折り本では不規則になってしまう。このことから、テ

クストの変更はF→Qであり、もともと二つ折り本の位置にあったエドガーの台詞が、四つ折り本のように後置されたと考えられるのである。

舞台上の流れを確認すると、二つ折り本では、ゴネリルとリーガンの凄惨な結末を聞いたエドモンドが二人と婚約していたことを白状した後、まず、ケントの到着がアナウンスされる。オルバニーは、気が動転しているためか、ケントの登場にはしばらく気が付かないまま、ゴネリルとリーガンの遺骸を運び入れるように命じる。その後、オルバニーは、おそらくすでにかなり近くまでやって来ているケントによりやく気づいて、それを確認しようとするのである。

四つ折り本では、エドモンドが白状した後、オルバニーはすぐに姉妹の遺骸を運び入れるように命じる。その後、エドガーがケントの到着を直接オルバニーに告げ、オルバニーもすぐにそれに気づいてケントに話しかけるという展開になっている。二つ折り本に見られるような、ケントが登場するもの、オルバニーはしばらくそれに気づかないという認識の空白が無くなっている。全体的に話の展開の単純化と明確化が図られているような印象を受ける。

明確化は、代名詞についても言える。二つ折り本に見られるオルバニーの最後の台詞は、ゴネリルに関する前半部分と、ケントに関する後半部分に分かれている。後半部分は、「これが彼か」で始まっており、この突然登場した「彼」が誰であるかは、文脈から判断しないと分からない。実際、現代版テキストの多くが、「これが彼か」という台詞の直前に、「ケントに」というト書きを挿入している。四つ折り本では、その直前に、「閣下、ケント伯です。」という台詞があることで、「彼」という代名詞に関する曖昧さはまったく感じられないのである。

改訂者が行ったと考えられる作業をまとめると次のようになるだろう。改訂者は、ケントの登場とそれに対するオルバニーの反応を接近させる必要を感じた。そこで、オルバニーの台詞をゴネリルに言及する前半部分とケントに言及する後半部分に分断し、その中間に、もともと少し前に置かれていた、エドガーがケントの登場を告げる台詞を挿入した。さらに、その台詞をオルバニーに対する直接の呼びかけにするために、「閣下」という言葉を付加したのである。

結果から推測するに、改訂者の意図は、話の展開をより理解しやすくするために整理して単純化することであったと考えられる。その目的のために改訂者は、短い台詞を移動するという手段を取ったのである。同じ目的を達成するために、台詞の一部を別の登場人物に語らせる、つまり、Speech Prefixを変更するという興味深い手段を使用した例が2幕4場に見られる。次にその例について見てみることにしよう。

3. 2幕4場に見られるSpeech Prefixの変更

2幕4場で、グロスターの邸を訪れたリアは、しばらく待たされた後、ようやくリーガンとコーンウォールに再会する。リアはゴネリルの薄情さを訴えて、リーガンを味方に付けようとするが、彼女は姉をかばおうとする。やがてゴネリルが到着し、姉妹の結束が固いことを目の当たりにしたリアは、すべてを理解してグロスターの邸を出ていくという場面である。このリアとゴネリルが再会するところに、興味深いSpeech Prefixの異同が見

られる。

王国の半分を分け与えたことまで持ち出してリアがリーガンの同情を引こうとした後、リーガンがそっけない返事をして、それに刺激されたリアが、ケントに足枷をはめた責任者を問いただすところから見てみよう。その続きが第一・二つ折り本では次のように描かれている。

F:

Reg. Good Sir, to'th'purpose. *Tucket within.*

Lear. Who put my man i'th'Stockes?

Enter Steward.

Corn. What Trumpet's that?

Reg. I know't, my Sisters: this approues her Letter,
That she would soone be heere. Is your Lady come?

Lear. This is a Slaue, whose easie borrowed pride
Dwels in the fickly grace of her he followes.

Out Varlet, from my sight.

Corn. What meanes your Grace?

Enter Gonerill

Lear. Who stockt my Seruant? *Regan,* I haue good hope
Thou did'st not know on't.

Who comes here? O Heauens!

If you do loue old men; if your sweet sway

Allow Obedience; if you your selues are old,

Make it your cause: Send downe, and take my part.

Art not asham'd to looke vpon this Beard?

O *Regan,* will you take her by the hand?

Gon. Why not by'th'hand Sir? How haue I offended?

All's not offence that indiscretion findes,

And dotage termes so.

(2.4.181-197; TLN 1466-1487)

リアは途中、オズワルドに注意をそらされてしまうが、2回、ケントに足枷をはめた責任者を問いただしている。しかし、そこにゴネリルが登場し、リアはまるで悪魔か怪物に出会ったかのように激しく反応する。

第一・四つ折り本でも、リアがオズワルドを口汚く罵り、コーンウォールから諷められるところまでは基本的に同じ展開である。しかし、それに続く台詞の最初の2行が、四つ折り本では、リアではなくゴネリルに割り当てられている⁵⁾。コーンウォールの台詞から見てみることにしよう。

Q:

Duke. What means your Grace? *Enter Gon.*

Gon. Who struck my seruant, *Regan* I haue good hope

Thou didst not know ant.

Lear. Who comes here? O heauens!

If you doe loue old men, if you sweet sway allow

Obedience, if your selues are old, make it your cause,

Send downe and take my part,

Art not asham'd to looke vpon this beard?

O *Regan* wilt thou take her by the hand?

(F1v 12-20)

四つ折り本のゴネリルは、二つ折り本より8行前で一度言葉を発することになる。そしてその台詞は二つ折り本のリアのものと同様であるが、動詞が「足枷をはめる」ではなく「叩く」になっている。このように、2幕4場でリアとゴネリルが再会する場面には、SPと単語の点で両テキスト間に異同が見られるのである。

四つ折り本でゴネリルに割り当てられた2行の台詞は、もともと彼女のものだったのだろうか、それとも、二つ折り本のように、リアの台詞の一部だったのだろうか。呼びかけ方に注目してみると、リアは2幕4場で、この箇所以外に7回リーガンと呼びかけている。それに対して、ゴネリルは、リーガンにSisterを使って呼びかけることが多い。リーガンと呼びかけることは全編を通して一度もない。

また、この台詞の中でthouという代名詞が使用されていることも参考になる。ゴネリルはリーガンにyouを使って話している。ゴネリルがリーガンにthouを使って話しかけることは全編を通して一度もない。リアは、ゴネリルとリーガンが結託していることを悟った直後など、ところどころで距離を置いたyouを使用しているが、thouを使う方が圧倒的に多い。

さらに、問題の2行の台詞は、自分の召使に対する暴行について、遠回しながら、リーガンを非難するものである。リアは、この台詞も含めると、3回同じことを質問して責任者を追及しようとしている。また、リアはこの時点ですでに、リーガンの態度がよそよそしいことに気づき始めているので、この台詞はこの時点のリアの置かれた状況や心理と矛盾しない。

それに対してゴネリルは、すぐ後でリーガンの手を取るから考えて、このあたりでリーガンに対して、たとえ間接的であれ、非難するような態度を取るのをおかしい。そもそも、オズワルドが打擲されたことにリーガンはまったく関わっていない。オズワルドは最初ゴネリルの邸でリアやケントに叩かれ、次にグロスターの邸の外でケントに叩かれ、そして、この場面で、ひょっとすると、リアに再び叩き出されたのかもしれない。いずれにしても、リーガンに責任の一端がある可能性は考えられない。それに対してリアは、足枷をはめたのはリーガンとコーンウォールだとケントからはっきり告げられているのである。

以上のことを考慮すると、この例についても、テキストの成立の順序はF→Qと考えて

よいだろう。ここでは、台詞の移動は見られず、台詞の一部が別の登場人物に割り当てられているだけなので、植字工の不注意によるものと考えられなくもない。しかし、台詞の鍵となる表現が「召使に足枷をはめる」から「召使を叩く」へと同時に変更されていることを考えると、このSPの変更も意図的なものと考えべきだろう⁶⁾。

改訂者の作業自体は、二つ折り本のリアの台詞のSPをゴネリルに変更し、そして、台詞の中身が少しでもゴネリルに相応しいものになるように動詞をstockからstrikeに変更するという比較的単純なものである。これは、印刷所関係者にも可能な改訂と言えるだろう。それでは、この改訂によって四つ折り本にどのような変化が生まれているのだろうか。

二つ折り本では、リアはしばらくゴネリルの登場に気づかないため、彼の注意は途中で目まぐるしく変動する。最初リーガンに向けられていたリアの注意は途中でゴネリルに移り、そして再びゴネリルの手を取るリーガンへと戻っていく。リアの注意の変動は、二人称代名詞の指示対象の変化によく表れている。最初のthouはリーガンを、続くyouは天上の神々を、artという動詞に隠れているthouはゴネリルを、そして最後のyouはリーガンを指している。文脈を考えれば理解できるはずだが、特に、固有名詞を出さず、いきなり代名詞の表現で始まる「(お前は) 恥ずかしくないのか」という質問については誤解の余地がないわけではない。実際、多くの現代版テキストでは、質問の前に、「ゴネリルに」というト書きが挿入されているのである。

四つ折り本では、ゴネリルは登場するとすぐに召使への暴行について問いただす。ゴネリルが最初からその存在をはっきり示すことで、リアがしばらくゴネリルの登場に気が付かないという認識の空白はなくなっている。同時に、「恥ずかしくないのか」という質問が向けられている「お前」は、直前の発話者であるゴネリルのことと自然に理解することができるため、二つ折り本に見られた代名詞に関する曖昧さもなくなっている。

2幕4場の例は、先に見た5幕3場の例のように短い台詞の移動ではなく、台詞の主を変えてしまうものなので、見方によっては、より大胆な改訂とすることもできるだろう。しかし、その作業の動機と考えられるもの、すなわち、登場人物の動きを整理し単純化することで、話の流れや台詞の意味をより明確にするという改訂者の意図は、二つの例で驚くほど共通しているのである。

4. 1幕4場のパッセージを削除した理由

これまで見てきた5幕3場と2幕4場の例から分かることは、四つ折り本の成立に関与したと考えられる改訂者は、一見すると分かりづらい登場人物の動きや台詞のやり取りを、必要最小限の変更によって単純化し、より明確にしようとする傾向があるということである。どちらの例も、劇場では、登場人物の動作や視線などによって、観客はあまり苦勞することなく理解することができるだろう。しかし、読者にとっては、おそらく、少し立ち止まって、人の動きを想像しないと理解しづらい場面である。四つ折り本では、そのような箇所を整理、単純化が図られていて、いわば、読者の苦勞が軽減されているのである。

このように、登場人物の動きや発話の対象を明確にするためには、短い台詞の移動やSPの変更を躊躇しない改訂者がいると仮定して、1幕4場の例をもう一度考えてみよう。この改訂者にとって、1幕4場の二つ折り本固有のパッセージの付近で一番気になるのは、

召使オズワルドが、主人に呼ばれているにもかかわらず、なかなか姿を見せないことだろう。この場面でゴネリルはオルバニーとオズワルド、そして道化に対して同時に指示を出す。具体的には、‘Pray you content’、‘What Oswald, hoa’、‘after your Master’の三つである。一番目と三番目の命令はすぐに達成されるが、二番目の指示だけ、何の説明もなくその達成が引き伸ばされる。道化の退場後、再度呼びかけられてもオズワルドはまだ姿を見せないのである。

5幕3場で、‘Here comes Kent’というエドガーのアナウンスがしばらく無視されることを気にして、それを少し後ろに移動し、ケントへの言及の直前に置いた改訂者にとって、返事が返ってこないオズワルドに対する最初の呼びかけを、オズワルドが実際に登場する直前に移動したいと考えることは決して不自然なことではないだろう。しかし、1幕4場の場合には、5幕3場よりもう少し複雑である。オズワルドに対する‘Oswald, I say’という二回目の呼びかけがあるからである。

もちろん、二回目の呼びかけだけを消して、オズワルドの登場の直前に一回目の呼びかけを移動するということも可能だろう。しかし、実際には二回目の呼びかけを含む15行からなるパッセージが削除された。その最大の理由は、改訂者が、道化が退場してから、オズワルドが登場するまで続く夫婦の会話を、基本的に、召使いを待っているだけの、時間つぶし的なやり取りと考えたからではないだろうか⁷⁾。実際には、リーガンに対する手紙のことなど、重要な内容も含まれているのだが、オズワルドが登場するのをいらいらして待ちながら、ゴネリルが相変わらずリアの非難を続けていると解釈できないこともない。あまり細部に注意することなく、台詞を削除してしまう手法は、2幕4場で見た、リアの台詞の一部をゴネリルの台詞に変更してしまう強引な手口と共通するところがある。

結局、改訂者は道化の退場直後からしばらく続く夫婦のやり取りを、二回目の呼びかけと共にすべて削除した。そして、‘How now Oswald?’というゴネリルの三回目の呼びかけも削除して、そこに一回目の呼びかけを移動した。さらに、その直後に、‘Here Madam’というオズワルドの返事を加筆した。このようにして、召使いが一度呼ばれたらすぐに登場するという単純な展開に変更したのである。結果的に四つ折り本では、ゴネリルの三つの命令は、一つずつ順番に、スムーズに達成されていくことになる。

二つ折り本に見られる、一見いたずらに悠長に感じられるオズワルドの登場方法は、実はゴネリルの心理を描写するために配慮されたものである。ゴネリルが道化を追い出す前にオズワルドを呼ぶことにも意味がある。この時点でゴネリルにとっての最優先事項は、リアに遅れないようにリーガンに手紙を届けて、彼女を確実に味方に付けることである。王国の奪還を示唆されたことで、ゴネリルはまさに命がけで時間と戦うことになる。ゴネリルは、オルバニーの話をつ断させてまで、急いでオズワルドを呼びつけなくてはならないのである。同様に、道化の退場後、ゴネリルが、リアのことを皮肉交じりに語りながら再びオズワルドを呼ぶのは、オズワルドが手紙を用意するのに手間取っていることと、そして、それを承知で急がせているゴネリルの焦りを表現するためである。

このように、二つ折り本の展開にはそれなりの意味があり、舞台上で上演される場合にはそれほど違和感を持たれないものと思われる。しかし活字で読む場合には、文脈を考え、登場人物の動きや心理を想像しないと理解しづらい箇所があることも事実である。四つ折り本ではそのあたりが大胆に整理されており、ゴネリルがリアを思い浮かべて、しかも皮

肉な調子でコメントしているのだと想像する必要もないし、呼ばれてもなかなか登場しないオズワルドの事情を想像する必要もないのである。

むすび

本論で明らかになったことは、四つ折り本『リア王』のテキストの成立過程には、登場人物の動きや発話の対象が曖昧な箇所をより明確なものに整理しようとする改訂者が介在し、その目的のために改訂者は、短い台詞を移動したり台詞の主を変更し、時には数行にわたるパッセージまで削除した可能性があるということである。

この改訂を、よりシンプルな上演を目的としたものとも考えることも不可能ではないかもしれない。しかし、本論で見た三つの例から判断する限り、そして、とりわけ、代名詞の指示対象の明確化につながっている点を考えると、この改訂は、上演のためではなく、読者の理解を助けるために行われたものとも考えるべきだろう。

本論で見た三つの例の場合、上演される場合には、たとえ二つ折り本に従っても、改訂者が感じたであろう登場人物の動きや発話対象に関する曖昧さなどはそれほど感じられないだろう。しかし、それを印刷本で読む際には、一部の箇所において、舞台という三次元空間での上演を想像しないと理解が困難であることも事実である。それに対して、四つ折り本では、必要最小限の変更を加えることにより、人の動きや台詞のやり取りがより単純で明確なものにされているのである。

このことは、『リア王』第一・四つ折り本の性質を議論する際に重要な意味を持つ。従来、第一・四つ折り本には粗悪なテキストという先入観が付きまどってきた。実際、植字工のものと思われる誤植は散見されるし、韻文の奇妙な行配列といった不規則性も多数見られる。しかし、本論で見た例に注目するなら、四つ折り本は読者のための編集がすでに一部加えられた、ある意味、読者により配慮されたテキストとも考えることもできる。現在なら、「ゴネリルに」や「道化に」といった発話対象を示すト書きを挿入して読者の便宜を図るところで、かなり強引な方法だが、必要最小限の改訂によって、同様の効果が達成されているのである。もちろんその分、作者のオリジナルの意図からは距離が隔たったテキストであるという点に注意する必要があるのは当然である。

本論で扱ったのは三つの例にすぎない。今後、同じ改訂者の手が加えられたと思われる例をさらに集めて整理する必要がある。単純化と明確化を志向する改訂者の存在が確立されれば、『リア王』のテキストに見られる、他の多くの異同の原因究明に重大な影響を与えることは確実である。例えば、5幕3場のラストシーンに見られるSP変更の問題に応用すれば、今までさまざまな議論を呼んできたこの不思議な異同について、より単純明快な説明を提出できるかもしれない。従来、植字工の単純な誤解や読み飛ばしが原因と考えられてきた異同についても、その背後に、読者への配慮という意外な動機が隠されている可能性があるのである⁸⁾。

注

- 1) W. W. Greg, *The Shakespeare First Folio: Its Bibliographical and Textual History* (Oxford: Clarendon Press, 1955), 375.
- 2) 『リア王』第一・二つ折り本からの引用はすべてCharlton Hinman, ed., *The Norton Facsimile: The First Folio of Shakespeare* (New York: Norton, 1968)に拠る。また、第一・四つ折り本と比較する際には、Michael Warren, ed., *The Parallel King Lear 1608-1623* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1989)も参照した。参考のために引用の末尾に付した幕・場・行数はG. Blakemore Evans, ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1974)に拠る。
- 3) 『リア王』第一・四つ折り本からの引用はすべてW. W. Greg, *King Lear, 1608 (Pied Bull Quarto)*, Shakespeare Quarto Facsimiles Number 1 (Oxford: Clarendon Press, 1939; reprint, 1964)に拠る。
- 4) P. W. K. Stone, *The Textual History of King Lear* (London: Scolar Press, 1980), 76-80.
- 5) リーガンに質問する2行の台詞は第二・四つ折り本(1619年)でもゴネリルの台詞になっている。大英図書館のサイト、'Treasure in Full: Shakespeare in Quarto' 参照。
- 6) ダシーは、植字工がstockedをstruckと勘違いして植字してしまい、その後で、SPがリアからゴネリルに変更されたと主張している。George Ian Duthie, ed., *Shakespeare's King Lear: A Critical Edition* (Oxford: Basil Blackwell, 1949), 88.この主張には二つの無理がある。まず、誤植をした植字工、あるいはそれをチェックした訂正者が、台詞の一部の意味が別の登場人物に相応しいからと考えて、SPを書き換えることは非現実的である。もう一点は、このあたりに名詞のstockが何回か登場するが、植字工はそれらを問題なく植字しているということである。SPの変更が先で、それに合わせて台詞の一部を書き換えたと考える方が妥当だろう。
- 7) 道化が退場した直後にゴネリルが発する台詞には他にも、いくつか問題点がある。まず、冒頭の「この男」の指示対象が読者を混乱させる。二つ折り本の流れから判断すると、道化のことと考えるのが自然である。しかし、読み進んでいくと、「彼」という代名詞で繰り返される「この男」がリアを指していることが次第に明らかになってくる。多くの現代版テキストが、「この男」とはリアであるとわざわざ解説していることも、道化と誤解してしまう読者が多いことを示している。さらに、ゴネリルがリアの発言をリーガンに宛てた手紙に書いたと言うところも読者を戸惑わせるだろう。そのようなことをする余裕がゴネリルにあるとは思えないからである。
- 8) この論文をほぼ書き終えたところにSir Brian Vickers, *The One King Lear* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2016)が出版された。この著書は、二つ折り本固有のパッセージをシェイクスピアのオリジナル原稿に存在していたものと考え、印刷所で意図的に削除されたものと考えている。ここまでは筆者と同じ考えである。しかし、ヴィカースはその動機を、印刷スペースの節約のためと主張しているが、筆者は、主な理由を、読者を意識した編集と考える。